# 研　究　総　論

## 1　研究主題について

| 研究主題　　学び続ける子どもの育成 |
|---|

私たちは，幼小中一貫したすべての教育活動を通して，豊かな「社会生活」を創造する資質や能力を育成したいと考えている。将来，家庭・職場・地域・社会における問題や状況に対して，他者との合意形成を図りながらよりよい方法を見付け出し，協働的に自律的に行動できる力を，子どもたちに身に付けさせたい。11年間の附属学校園での学びを通して，他者とともに自らの課題を追求・解決する過程にある学ぶことの真の楽しさにふれ，生涯にわたって学び続け，豊かな社会生活の創造に寄与する人間に成長してほしい，という願いをもって私たちは一貫した教育活動を行っている。

前次研究「豊かな『学び』をつくる子どもの育成」で進めてきた研究は，確かな学力の育成を目指して思考力・判断力・表現力の育成に取り組んだ。この研究においては，思考力・判断力・表現力を育てたり高めたりするかかわり合いを学び合いと定義し，学び合いを通した思考力・判断力・表現力の育成のためのよりよい保育や授業の構想や教師のはたらきかけについて研究を深めた。子どもを的確にとらえ，教師の明確なねらいに基づいた協働的な学び合いの場を設定することによって，「豊かな『学び』をつくる子どもの育成」に迫ることができた。前次研究の最終段階では，子どもがこれまでの学びを自らいかし，新たな学びをつくりあげていくような「学びを拓く子どもの姿」を求めた。これはすなわち，学んだことをいかすことに焦点を当てて思考力・判断力・表現力を育成していこうとする試みである。たとえば，中学１年生の国語科の学習において，人称視点について学習した単元のふりかえりでは次のようなものがあった。

> 今回は，一人称視点と三人称視点を勉強しました。すると，それぞれには特徴がありました。話の内容によってその話の作者の思いを伝えるように，一人称か三人称か考えて作っていることです。これからは，一人称，三人称を意識して本を読んでみて，どうしてこれを○人称にしたのか，もし別の視点にしたらどんな不都合な点があるのか，などを考えて読んでみたいです。

この生徒は，国語科の学習において学んだことを，次の読書生活に具体的にいかしていこうとする意欲をもって単元を終えようとしている。人称視点という読みを進めていく上での明確な手がかりを得たことが，自分の読書生活をよりよいものにしようとする意欲を喚起されることにつながった一例であるといえる。このように，本学校園の子どもたちには，課題に真摯に取り組み，自らの力を主体的に伸ばしていこうとする姿が多く見られる。

今次研究の研究主題を設定するにあたっては，これまでの研究のよさを継続していくことや，上の例に挙げたような附属学校園の子どものよさをさらに伸ばすことを大切にしたい。

子どもは本来「もっと知りたい」，「もっとやってみたい」と，自ら高みを目指して追求する存在であるという教育観に私たちは立っている。自ら願いをもった子どもは，意欲をもって自らの課題解決に向かって追求していく。そうした子どもたちの追求意欲を喚起するような学習を私たちはこれまでにどれだけ展開することができていたであろうか。学び続け，自らの力を主体的に伸ばしていくような姿を求めていきたいと私たちは日々願っている。こうした立場から，育てたい子どもの

姿について協議を重ねてきた。ここで浮かび上がってきたのが，「子どもが自ら問いをもち，粘り強く何度も練り直しながら追求し続けていく姿」である。そこで，今次研究の研究主題を「学び続ける子どもの育成」とした。

ここで，私たちのいう「学び」とは学校での授業における学習のみではない。学びというものは授業内のみならず，日常のくらしの中に多様に存在する。例えば前述の国語の学習で学んだことを，日常の読書の中でもいかしていくことによって，読書活動はより豊かなものとなり得る。こうして子どもたちの身の回りにあるあらゆる対象から今までより新しい見方や考え方を得ることを私たちは「学び」ととらえたい。そうした学びが主体的に広がったり深まったりすること，すなわち自分の意志によって連続していき，自らを高め続けることこそ，「学び続ける子ども」そのものなのである。

## 2 「学び続ける子ども」とは

### (1) 目指す子どもの姿

私たちは幼稚園から中学校の各段階において，保育や授業という接点から一人一人の子どもの力を伸ばしていくにあたり，学び続ける子どもを育てていくためのよりよい保育や授業を構想していく。そうした保育・教科において研究を進めるに当たり，目指す子どもの姿を次のようにした。

**目指す子どもの姿　　一人一人が問いをもち追求する姿**

子どもの中にすでに慣れ親しんでいる体験があり，その体験とは異なる新しいものが入ってきたとき，その違いを何とか埋め合わそうと均衡を保とうとする。この刺激が動機となり，子どもの中で，学びたいという欲求へとつながっていくであろう。一人一人の子どもにこうした学びへの動機があり，そこに驚きや信念があれば，自分に納得がいくまで問い続けるであろう。こうした子どもの中に解決したい問いがあれば，解決へ向けて様々な方法を試したり友だちと協力したりして追求していくと考える。すなわち，子どもの中に自らの意志で学びを続けたいという意欲があるということは，解決したい問いが具体的な形で子どもの中にあることと私たちは考えた。その問いの解決への道筋が，暗闇の中で糸口を探すようなものであれば，子どもたちの学び続ける意欲も減退していくに違いない。つまり，子どもたちが意欲をもって学び続けている時には，その問いが生まれた動機があることに加え，解決への道筋がある程度見えた状態なのではないかと考えた。

たとえば，年長組の保育において，子どもたちがお祭りのイメージをもって遊んでいた時のことである。子どもたちの中から「つき組（年長組）さん，みんなでお祭りしたら楽しいんじゃない？」という声が上がった。それを実現していく過程では，段ボールで階段をつくるために素材について何がよいのか話し合い，得意な子どもに聞いたり前に遊んだ経験を思い出したりして，協力して階段を作り上げる姿があった。また，みんなでお神輿をするために形にこだわり，担ぎ棒のつけ方もみんなで考えた。お客さんにたくさん来てもらう工夫も考える姿もあった。お祭りをクラスのみんなで楽しむ，という最終的なイメージが子どもたちの中にあったことが，では，どうすれば実現できるかという問いが次々に生まれることにつながり，よりよいお祭りにしていこうと追求する姿として現れたと考えられる。

私たちは「学び続ける子ども」を育成していくために，保育や授業を構想していく中で，このような姿を目指していきたいと考える。



### (2) 「問い」とは

私たちが研究を進めていく上で，「問い」を次のようにとらえる。

◎ 子どもたちが切実な解決を願うもの

・・対象との出会い，教師からの投げかけ，子どもの学習経験など様々な要因によって子どもたちは問いをもつであろうが，いずれも子どもにとって切実に解決を願うものとしたい。

○ 学問のおもしろさにふれることができるもの

・・私たちは保育や各教科等の日々の学習において，目標とする力をいかにしてつけていくか，そうした力を自分のものにするための学び方をいかにして獲得させていくか，工夫を重ねているところである。こうした力が自分についたことを自覚し，子どもたちは学問のおもしろさを実感し，追求を深める原動力となるであろう。今までよりも新しい見方や考え方を得て「学び」を実感していくことを引き起こしていくことへとつながっていくことが期待できる。

○ 単元を貫くものと質的変化するもの

・・単元の初期段階でもち，単元を通してもつ問いもあれば，学習が進んで個の深い追求や他者と学び合って異なる考えに出会うなどして，対象に対する認識の変化が生まれて変化する問いもあるであろう。こうした問いは全く新しいものではなく，最初の問いが変化したり派生したりして新たに生まれたりしてできるものと考える。そのようなことを「質的変化」と考える。

○ 発達段階によって変化するもの

・・幼稚園から中学校まで幅広い発達段階の子どもたちが，同じような仕組みで問いをもつとは考えにくい。例えば幼稚園児であるなら遊びに没頭する中で見いだすものもあるだろう。中学生なら学習の対象に出会い，個の中でじっくりと考えていく中で静かに追求しながら見いだす問いもあるであろう。その質も，それぞれの段階でつけたい力によって異なってくると考える。

これらの問いは，子どもが自ら「解決したい」と思えるものであれば，主体的に解決しようと追求していくであろう。そうした「問い」をもち，追求する姿こそ，私たちが求める姿である。こうした姿が現れるためにも，◎で示したように，子どもたちが切実な解決を願う「問い」でなければならない。

私たちは，保育や授業を通して子どもたちが主体的に自らの「問い」をもち，追求する姿が生まれるような学びをつくっていきたい。

### (3) 「一人一人が問いをもち追求する姿」の具体

「問い」をもち，追求する具体的な子どもの姿を，以下のように考えた。

○ 願いをもっている　　○ 疑問や調べたいことをもっている
○ 見通しをもっている　　○ 粘り強く何度も練り直している
○ 試行錯誤している　　○ 立ち止まって考えている
○ 友だちの考えを取り入れ，自分の考えをよりよいものにしようとしている

授業者は，実際の授業において，子どもたちの見方の広がりや思考の深まりなどを目指してはたらきかけていく。どういう姿が出てほしいと願うのか，教科や単元によって異なるであろう。また，発達段階によってもその姿は異なってくる。

例えば，小学校４年生図工「ふわふわくねくね風からのおくりものをつくろう」の学習でのこと

である。風による素材の動きや風で膨らむ袋の形をとらえ，動きや形の見立てからイメージをふくらませる，という題材と出会って間もない学習でのふりかえりに，次のようなことを書いた子どもがいた。

> (略)…カラーセロハンを細かく切ってみました。全く飛びませんでした。飛ぶかわりに，送風機に入ってしまったのでやめました。次はふつうに，ふくろをふくらませました。おもしろくなかったので，ふくろの先を両方結んで，ねこのようにしました。そしたら，別のもののようになりました。(略) また作り直したいなあと思いました。たこのような物も作りたいなあ，と思っています。

この子どもは，素材と出会い，次々と試していく中で，自分の感じるままに表したいことや工夫したいことを見付け出そうとしている。こうして出会いの段階で「こうしたい」という願いをもち，いろいろと試行錯誤しながら，題材に対する自らの問いをもとうとしていることが分かる。この後，実際に自分が作りたいものを作る時間を経た，第７時でのふりかえりである。

> ねこを集中して作りました。作っていたら，みんなが「うさぎ？」と言ってきました。うさぎならもっと耳が長いからちがうのになぁ…。と思いました。でも，ねこと言ってくれた人もいました。全員にねこと言ってほしいので，すずを付けようと思っています。作って，どんどん考えていくのは楽しいなあ，と思いました。

最初は何となく作っていたねこについて，この段階では「ねこと分かってほしい。そのためにどうすればよいか。」という問いにまで発展している。ここでは，教師がこの子どもの表現の意図を探るはたらきかけを行い，この子ども自身もあれこれと試行錯誤し，友だちの考えを受けてさらによりよいものにしようとしている。また，そこに楽しさを見出している。

私たちは目の前の子どもたちにどんな授業を展開していくのか思いえがく際に，日頃の子どものとらえに基づいて，前述のような姿がどこでどのように，どの程度出ることを期待するのか考えていくことを大切にしていきたい。そうすることで，この図工の実践のような問いをもつ子どもが具体的な姿として現れてくるのではないだろうか。そうして実践を積み上げていく中で，前述の「問いをもち追求する姿」はさらに整理・統合されていくであろう。

以下に，このような姿が出るためには，授業の中で私たちがどのようなことをすべきか，その具体策について述べていく。

## ３　一人一人が問いをもち，追求する姿が現れるために

### (1) 追求する姿の現れる学習構造

前項に挙げたような子どもの姿は，ただ学習する対象に子どもたちを出会わせることによって現れてくるものではない。対象との出会いから学習を終えて自分の取組を振り返るまでの様々な場面でこうした姿が現れるよう，意図した展開をしていかねばならない。

そこで，私たちは以下のような保育・授業を構成する要素を柔軟に組み立てていく。そして，子どもたち一人一人が問いをもち，追求していく姿が見られるような保育・授業をつくっていきたい。

**① 学ぶ対象に出会う**

子どもたちは日ごろから何か気になるものに出会うと，彼らのもつ好奇心からそれらの対象に対して「もっと知りたいなあ」「なぜだろう」といった興味や疑問をもつ。このような対象が，私たちが授業を構想する際に子どもたちにつけたい力をさらに高めていくようなものであり，なおかつ出会うことで感じた興味や疑問が，切実に解決したくなる問いとなるようなものが望ましい。そうした，適度な困難さをともない，解決の喜びを子どもが感じられるような対象を私たちは吟味していきたい。

しかし，それは単に学習の対象としてのよさをもつだけでよいというものではない。対象にどのように出会わせていくのか，出会ったことが次にどうつながっていくのか，といった，出会いからその次への構想や実際に子どもたちを前にしてはたらきかける時のあり方を熟慮していく必要は言うまでもないことである。また，何をどう出会わせるか，ということは一人一人の子どものことをしっかりととらえ，その子どもたちに応じた出会わせ方を工夫していかなければならない。

以上の点を大切にしていくことによって，子どもにとって必要のある学びとなり，追求への意欲はより高まるであろう。そう考えられるような学びの対象を選定すること，出会わせ方を熟慮することが必要である。

**② 自身の問いをもち，考えを深めていく**

学ぶ対象に出会い，もっと考えてみたいという意欲をもった子どもたちは，おぼろげに何とかしてみたいという気持ちから，自らの問いをこういうふうに考えて解決していけばよいのではないか，という見通しをもつことで，解決への意欲が高まるであろう。自身の興味や疑問が問いという形にまで高められるように，疑問をもったことについて子どもなりに解決したいという思いに基づいて編み出した活動ができる時間を確保したり，子どもが考えていることを整理してみたりすることが考えられる。つまり，自身のもった「興味や疑問」について自分なりに熟考する場をもつということである。

こうして，何となく感じていた疑問が，「問い」として子どもたちの中に成立する状態を目指したい。学習の初期段階であるならば，いかに問いをもてるか，ということを目指す姿となる。また，問いが質的な変化をしていくような段階であれば，自身の中に湧いた問いを何度も練り直し，これを自分はもっと追求したい，という思いへと高めていくことが目指す姿となる。

つまり，一人一人が問いをもち，それによって自身の考えがより深まっていくような学習の展開を大切に考えていきたい。

**③ 互いに高め合う**

自身の中に問いが生まれ，解決への道筋が見えてきた子どもたちにとって，他者の取組を知ることは，新しい見方や考え方が加わったり，自分のもっていた考えが揺さぶられたりするなど，学びが深まっていくことである。例えば音楽の授業で，ある楽曲に出会ってこのように歌いたいと考えたとき，仲間の歌う姿にふれたり，自分が歌ったことに対してそれを仲間がどう考えているかを知ったりする機会を得るとする。このことは，自分の歌い方を見つめ直す機会となり，自らの歌い方に足りないことは何だろうか，友だちのように歌うには，○○という点をもっと伸ばしていきたい，といった考えの変容が見られるであろう。仲間の姿から自分がよいと思える点を取り入れたり，仲間の考えに揺さぶられたりすることは，個々の追求により深みが増していくことが期待できる。

私たちはこれまでにも，子どもたちが個々に考え出したことを，他者の考えに出会わせることによって，自分の取組を立ち止まって考え，個々の考えを高めていく段階を意図的計画的に取り入れてきた。こうした協働的な営みを「学び合い」として位置づけ，学習の中で欠かせない過程として取り組んできた。学習の過程の中でこのように子どもたちが他者の考えを取り入れることで，自らに問いかけ，また新たな問いが生まれ，学習に広がりや深まりをもたせていきたい。こうした他者の考えに触れるような活動を経ることで，学習内容への理解を促すとともに，②で述べたような問いの深まりが期待できるであろう。

**④ 自分の取組を振り返る**

子どもたちが上記のような段階を経ながら自身の問いの解決に向けていったとき，自分の取組の

よさといった学び方としての価値，獲得した学習内容としての価値など，自らの学びの価値を感じるであろう。その感じ方は，ほぼ無自覚な子どももいれば，取組のたびに自覚していく子どももいると考える。私たちは，自らの学びの価値を実感し，それを自分のものとして取り入れ，次の学びにいかす子どもの姿をこれまでの研究から見出してきた。こうしたふりかえりの場面があることで，学んだことへの有用感を感じるとともに，新たな問いが生まれ，追求が続き，より学びが深まっていくであろう。自ら問いをもち，追求する子どもを育てていくには，自らの学びの価値を実感するこのような場面が必要だと考える。

こうしたふりかえりの場面というのは，１単位時間の中の短いスパンのふりかえり，単元終了時の長いスパンのふりかえりがある。短いスパンのふりかえりの集積があることで，長いスパンのふりかえりがより深いものになるであろう。こうした経験を発達に応じて意図的計画的に積み重ねていくことで，より深みのある追求をしていく子どもが育っていくであろう。

### (2) 保育・授業内における教師の役割

問いをもち追求する姿を目指すためには，子どもが問いをもとうとしているときや，もった問いをさらに深めていこうとするときなどに，必要に応じて教師が子どもの考えの背景を探りながら整理したり，方向付けたりすることが必要である。こうした直接的なはたらきかけが，子どもにとってプラスに働くことで，子どもが自分の問いを自覚し，解決したいという思いが高まるであろう。

子どもにとってプラスになったり，自らの問いをもって解決していくよさを見いだしたりするために，まず私たちがすべきことは，子どもをとらえることである。子どものとらえがしっかりしていると，その子どものよさをさらに伸ばすようなはたらきかけを保育や授業の中で実現できるであろう。例えば，取組を価値付けたり，迷っている子どもへ道筋を方向づけしたりすることなどが考えられる。これらは実践を通して検証していきたい。

## 4 おわりに

前次研究を受け，今年度から「学び続ける子どもの育成」を主題とする研究がスタートした。しかし，何も全く新しいことを私たちは目指しているわけではない。子どもが追求する姿を求めることは，私たちが常に意識し続けてきたことである。そこに「問い」をもつという視点を当てることにより，追求する姿を目指すのが今次研究の特色といえるであろう。この営みそのものが「学び続ける子どもの育成」であると考え，望ましい「問い」をもつ姿が具現化すること，そしてそのために私たちができることはどんなことなのか，ということについて，研究を推進していきたい。

学び続ける子どもを育てることは，生涯にわたって学び続け，自らの人生をより豊かなものにしていくことへとつながると考える。４歳から15歳までの成長過程で大きな変化をみることのできるまさにその時に，私たちがそうした方向性での学習を一貫して行うことは，一人一人の人生をより豊かなものにしていく基盤を育てていくための営みである。そう考えると私たち教師も学び続けている存在そのものであり，子どもたちとともによりよい学びをつくりあげていくことを何よりも大切にしていきたい。

（文責　喜多川　昭博）

【参考文献等】
・アルベルト・オリヴェリオ『メタ認知的アプローチによる学ぶ技術』創元社，2005
・中谷素之『学ぶ意欲を育てる人間関係づくり　動機づけの教育心理学』金子書房，2007